



富山市万願寺の兵法靈驗加護不動尊と丸岡善太郎

平井一雄

1、万願寺の不動尊と丸岡善太郎

富山市(旧大沢野町)万願寺の南、通称「殿山・トノヤマ」に高さ約二、二メートル、横幅約二メートルの大きな不動明王が安置されています。

この不動明王の岩石は通称「イワタン」という谷川からソリに乗せて運んだといわれています。大変重かったため、これを引く繩は普通のものではなく、ワラと竹の裂いたもの、女の人の髪の毛や馬の尾の毛をよりあわせて、一緒にして編んだ繩を使用したそうです。その繩の一部は不動堂の屋根裏に保存してあります。

不動尊には次の銘文が彫ってあります。

「四心多久間見日流 佐々井和左エ門忠政 門人 丸岡善太郎碑 明治三十
五壬寅年建立 丸岡イワ 丸岡トキ 丸岡スミ 丸岡ナミ」

この不動さまを、村人は火よけの仏、正邪曲直の仏さまと信じて信仰しています。現在の不動尊の建物は、昭和二十九年、当時万願寺総代であった丸山静治氏を中心となり、丸岡善太郎の子孫にあたる丸岡清信氏が地元の人たちの協力によって再建したものです。

丸岡家は大正初期、月岡村今町に移住しました。子孫は現在も不動さまをお守りしておられ、東薬寺(大山町牧野)の人見住職さんの読教で毎年八月

に祭事が行われています。その日は近隣の信者が参られ、その信仰の深さが伺われます。

2、四心多久間見日流の伝承

「四心多久間見日流」という忍法護身術について書いてある古文書が万願寺に残っています。地主であった丸岡善太郎は、村人たちが必要とする肥料や資材などを買うため、牛車を曳いて、富山・岩瀬方面までよく通いました。

善太郎は道中の身の危険を考え、兵法学道場に入門することにしました。途中の中島と言う所の「四心多久間見日流(ししんたくまけんじつりゅう)兵法」師範の佐々井和左工門の門人となり苦業の末、明治二十四年免許皆伝の師匠となりました。

善太郎は、すぐれた素質をもち、またけい古熱心で、厳しい修行を乗り越え、免許皆伝の実力を得ました。丸岡善太郎は丸山憲三(丸山順一郎の分家)の建物を道場として、自ら師範となって若者たちに兵法を教えました。農作業を終えた若者たちと夜おそくまでけい古しました。その姿は人間のなす技とは思えぬ忍法技でした。丸岡善太郎は、こうした兵法の靈驗加護のため、兵法と信仰を結びつけようと不動明王を祀りました。

丸山順一郎重則は丸岡善太郎より二十年前に、佐々井和左衛門の弟子となつて、免許皆伝となつていた。

忍術は、あくまでも護身のためであるという思いから、手裏剣の受け方、天井、畳の下のはりつき方、空中のとび方など、それはみごとなものだったそうです。

第53号
 平成29年12月15日発行
 編集と発行
北陸石仏の会
 (日本石仏協会北陸支部)
 代表 平井一雄
 〒939-1315
 富山県砺波市太田
 1770 尾田武雄方
 電話 0763-32-2772
 振替 00740-2-11974
 (年会費 3000円)

- ・万願寺不動尊と丸岡善太郎
- ・石仏講座に参加して
- ・毛矢白山神社の石祠
- ・輪島市門前町にて
- ・第55回例会報告
- ・バット地蔵

明治三十五年到现在地に「不動堂」を建て、この地で近隣の村人、遠くは富山市の方から門人が集まりその数一〇七名にもなりました。不動尊の裏側に門人たちの氏名が浅く刻み込まれています。

万願寺には、先の古文書のほかに、数巻の武術の巻物が残っています。(現在、丸山俊一氏、丸岡清信氏がそれぞれ家宝として保存している。

「船峠のむかしがたり」より

文政六(一八五九)年、万延元年(一八六〇)、文久二(一八六二)年にかけて佐々井和左衛門より各流儀の印可を受けている。丸岡家文書、丸山家文書

3、忍者頭の佐々井家 『奥田郷土史』平成八年四月発行より

中島の佐々井家の祖先は、昔加賀藩の忍者頭だったと伝えている。

廃藩後中島で帰農したが、その後も武芸の道に励み、その片鱗をうかがわせるような話が残っている。まず身のこなしが大変軽く、春に塗ったばかりの田んぼの畦の上を高下駄で渡つても跡がつかかった。また中島から新庄まで五分間で飛んでいったという。中略

佐々井家は、加賀藩の「象嵌」彫金技術を持ち、金銀細工にすぐれ、金杯・銀杯や龍紋彫りのきせるなど、名品を作っていた。そのきせるは中島では「佐々井はんのきせる」として有名であったという。

4、足立塚と古文書類

四心多久間見日流和(やわら)術を富山藩に伝えた足立平陸の顕彰碑が富山市五時谷に建てられていた。「足立塚」と刻まれており、現在は呉羽丘陵多目的広場に移設されている。

富山県立図書館蔵の「諸藝雑誌」には「四心多久間四代見日流和」の項があり足立平陸と弟子達の経歴を記している。

又、猪谷関所館蔵の橋本文書にも「四心多久間見日流秘口伝書」があり関所役人、橋本万助が文化二年免許皆伝を受けたことを伝えている。

5、足立塚と足立平陸

次号に回します。



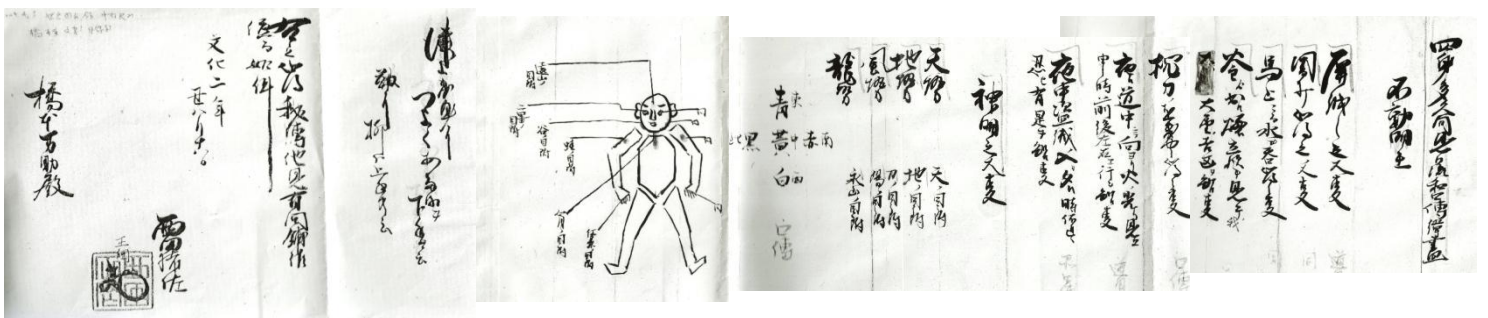
足立塚



不動明王石碑用石材運搬用引き綱



丸岡善太郎碑の不動明王石碑



猪谷関所館橋本文書四身多久間見日流和口傳書

日本石仏協会主催「第三十九回石仏講座」に参加して

尾田 武雄

八月二十六日、日本石仏協会主催「第三十九回石仏講座」が東京の大正大学大講堂で開かれた。私は午後から第三講として小松光衛氏の紹介で「真宗と石仏―聖徳太子南無仏と法蔵菩薩の造像の意図について―」を発表させて頂いた。初めての北陸新幹線で、妻とともに参加した。平成十三年日本石仏協会創立二十五周年で「東西文化の接点・北陸の石仏」について発表したことを紹介し、北陸は日本の東西文化の接点であり魅力的な地域であることを発表した。

富山県は仏教宗派における真宗の割合が七十%強であり、真宗王国であること、真宗では「おおよそ造像・起塔は、弥陀の本願にあらざる所行なり」（覚如著『改邪鈔』）、また「他流には『名号より絵像、えぞうより木造』というなり、当流には『木造より絵像、えぞうより名号』というなり」（蓮如上人御一代記聞書）」とされ、偶像崇拜はしないのにも関わらず石仏が多い事など、序章として発表した。

富山県西部には聖徳太子南無仏が明治二十年ごろから大正期の約三十年の間に、二百四十数体が造像されたのは、真宗大谷派井波別院瑞泉寺との関りを説いた。また東部には法蔵菩薩の石仏（木造も含む）が二十二体確認している。全国的にも珍しい瘦せた法蔵菩薩を紹介した。いわゆるやせ仏の憔悴像法蔵菩薩は、真宗の盛んな肥後轍といわれる熊本県、芸轍といわれる安芸門徒の広島県、三河門徒の愛知県それに鹿児島県、滋賀県などの散見できることを報告した。これは真宗が江戸時代中期頃から盛んであった真宗教学を地方学塾の教えが根付いたのであろう。特に真宗の教えを説いた節談説教等の布教活動などによって広まったものと思われる。「上手な説教師は自由自在に善男善女の感情、心理をあやつることができた。質問されることはなかった。『聖人つねの仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひ

とえに親鸞一人がためなり』というところでは、唯一の泣かせどころのように、浪曲顔負けの節まわしでうなった。さんざん翻弄され、いい気持ちにさせられた参詣者は、ひとりのこらず仏にたすけられたような気持ちになっってしまうのである」関山和夫著『庶民文化と仏教』

これは、三業惑乱以後の真宗の門徒（庶民）の布教活動の状況もうかがわれるのである。学匠の篤信者、学匠の多く出たところに五劫思惟の法蔵菩薩の造像が見受けられる。富山県東部は、やはり黒部市宇奈月町の善巧寺では江戸時代末に空華廬（くうげろ）を設けて学僧を教育、その門弟は三千人に及ぶといわれている。

なぜ、この阿弥陀如来の前身である憔悴像の法蔵菩薩が、現在忘れ去られたかであるが、それは学塾の不振と近代教学の発展であり、真宗の近世と近代の断絶であろうと思われる。また近世には歎異抄後序の教えのそれなりに浸透し、地方の学塾のレベルの高さ、門徒とともに生きた説教者の姿を垣間見るような気がする」と報告した。真宗の教えは一方的な教団側だけではない、門徒側の視点も大事であるとも思った。（尚、当日『ミステリーな仏像』の著者本田不二雄氏がわざわざ、私の講演を聞きに下さり感謝いたします）



石仏講座（大正大学）



真宗と石仏のパワーポイント

福井市毛矢白山神社の石祠など

滝本 やすし

福井県福井市毛矢三丁目の毛矢黒龍神社境内に、稲荷神社、菅原神社、桜井神社の石祠が並んでいる。その脇の石段を登ると開けた場所があり、白山神社の標柱と鳥居が目に入る。藤島神社駐車場東側の石段を降りたほうが近いようだ。白山神社は萬延元年創建と伝えられ、神社庁に登録されていない非宗教法人で、地区の人達によって管理されている。

鳥居をくぐり、灯籠と狛犬の間を抜け、石段を登ると、正面に七基の石祠が並んでいる。他よりもやや大きい中央の石祠が白山神社の本殿である。その左手にも二基の石祠が並んでいる。向って右の石祠から順に見ていこう。

いちばん右の石祠は正面に日月の窓が開けられており、「キリク・八幡宮」と刻まれている。内部には、御神体や奉納物は確認できない。

右から二番目の石祠は正面に日月の窓が開けられており、その右に「萬延元庚申秋奉繕之」、左に「永善五郎右エ」と刻まれている。奥壁内面に阿弥陀如来立像が浮彫りされているので、この石祠も八幡神社と思われる。奥壁内面に彫られている阿弥陀如来像の手法は十八世紀前半と考えられるので、石祠正面の銘文は後刻と思われる。

右から三番目の石祠は正面に日月の窓が開けられており、中央に「山神」、右に萬延元庚申秋奉■、左に「木戸市三郎」と刻まれている。石祠の奥壁内面に「宝永七庚寅：／阿克・山神十羅刹：」の文字が読み取れる。「阿克」の種子は釈迦如来、「山神」は鬼子母神、「十羅刹」は十羅刹女と考えられる。石祠正面と奥壁内面に刻まれた年号は百五十年の隔たりがあることから、この石祠の正面の銘文も後刻と思われる。

他よりもやや大きい中央の石祠は白山神社の本殿で、正面の扉が欠損している。石祠の前に二体の狛犬が置かれているが、別々に作られたものようである。石祠奥壁内面に、白山三所権現が浮彫りされた石板が立てかけられ

ている。中央に御前峰の本地仏である十一面観音、向って右に大汝峰の本地仏である阿弥陀如来、左には別山の本地仏である聖観音が彫られている。各尊像の下にはそれぞれ、御前峰、大汝峰、別山の山々が彫られている。その手法から、十八世紀の作と考えられる。

右から五番目の石祠も正面の扉が欠損している。奥壁内面に六字明王立像が浮彫りされているので、この石祠は神明神社である。この六字明王立像も、十八世紀の作と考えられる。

右から六番目の石祠は正面に長方形の窓が二つ並んで開けられており、「神明／慶長十八年／三月二十八日」と刻まれている。奥壁内面に六字明王立像が浮彫りされている。その手法から、慶長十八年当時の作と思われる。

右から七番目の石祠は、正面に「八」の文字の窓が開けられている。越前地方では他にも同様の窓が開けられた石祠がいくつかあり、いずれも八幡神社であることから、この石祠も八幡神社と思われる。奥壁内面に男神座像が浮彫りされており、菅田別尊(応神天皇)と考えられる。十八世紀前半の作のようである。

これら七基の石祠の左手に、二基の石祠を含む六基の石造物が並んでいる。いちばん右は観音座像の残欠のようである。白山神あるいは稲荷神の本地仏として彫られたものであろうか。

右から二番目は「稲荷神社」と刻まれた角型の石板である。石祠の前に置かれていたものであろうか。

右から三番目は「キヤ・正一稲荷大明神」と刻まれた石柱で、稲荷神社の御神体であったと考えられる。「キヤ」は稲荷大明神の本地仏である十一面観音の種子である。

右から四番目は地藏立像である。駒型の光背であり、本地仏として彫られたものではなさそうである。

右から五番目は二基並んでいる右の石祠で、正面に「菅原神社」と刻まれた扉が取り付けられている。この扉は後補のものである。石祠内には渡唐天神が線刻された石板が納められている。類例がないので造立年代を特定でき



福井市毛矢3丁目白山神社全景

ないが、十八世紀の作であろうか。
 いちばん左は二基並んでいる左の石祠で、正面に日月の窓が開けられている。内部には「正一位稲荷」と刻まれた石板が納められているが、先述の「キヤ・正一稲荷大明神」と刻まれた石柱がもとの御神体だったのではないかと考えられる。
 白山神社は萬延二年創建と伝えられているが、境内の石造物の多くは十八世紀頃の作であり、十七世紀初めのももみられる。本殿石祠の右の二基の石祠に「萬延元庚申秋奉繕之」と後刻されているので、白山神社創建の際に既存の石祠が並べられたのであろうか。



白山神社御神体の白山三所権現



白山神社本殿石祠



菅原神社御神体の渡唐天神



八幡神社御神体の誉田別尊



神明神社御神体の六字明王

輪島市門前町にて

池田 紀子

輪島市門前町深見には低い山なのですが急斜面の続いたあとの頂上付近に「十三塚の板碑」があります。『歴史の道調査報告書 第四集』（平成九年）に《深見集落の東南約六百メートル、標高約百二十メートルの深見から道下に通じた道の脇の直径約五メートル高さ約一メートルの塚の上に立っている。口碑として、漂流者十三人の死体を埋めたくと、十三才の娘が牛に追われてここまで来て殺されその霊を弔ったとも伝えられている。〔南無妙法蓮華経〕の日蓮宗の題目が刻まれている板碑は高さ五十七センチメートル上部幅二十、六センチメートル、上部厚さ十五センチメートルとあり建立は室町末期と記載されていました。また地元の記録にはこの「南無妙法蓮華経」の板碑について《十三塚と称される塚の上に建っている。門前町へ日蓮宗が入ってきたことを示す貴重な資料である》と書いてあります。

川を挟んだ真向かいの山には男滝女滝と呼ばれる所に神社があります。ここは滝神社といい案内板には《滝神社と桜滝 能登の名瀑として知られる桜滝には男滝と女滝があり、古代・中世には修験者の霊地で平安時代の仏像や鎌倉時代の神像などが祀られている。また滝神社の上の社叢の原生林は県の天然記念物に指定されており、背後の猿山には明治時代まで猿が住んでいた》とあります。本殿の奥はもう突き当たりの岩山でその岩窟に『岩屋開山「種子」玉珠』と彫られた板碑があり《室町時代の板碑で岩屋開山の玉珠の銘がある》と記されています。その横になぜか『鯨の骨』があり《むかし、鯨が一頭寄ると七つの村がうるおうといわれた。元禄二年（一六八九）深見と鹿磯の境へ流れ寄った鯨の骨と思われる》と説明が書いてありました。またここには門前町指定文化財になっている木造如来像があり、平安時代の素朴な作風は心が落ちつきます。

また輪島市門前町道下では蕎麦屋の駐車場の一角に並んでいる石造物があ

ります。左から丸彫りの地藏合掌立像、弥勒菩薩坐像、勇嶋平次郎の力士碑、道下の俳人河内亀声の《朝な夕かすみは山の位かな》の句碑（明治二九年建立）です。弥勒菩薩坐像の建立は宝曆と思われます。以前は道下集落の入口にあつて村人に信仰されていたものをここに移しました。独尊で美しい姿です。



道下の石造物群



岩屋開山板碑



題目板碑



弥勒菩薩



木造如来像



鯨の骨

「布施谷の石仏めぐり」報告

文山純子・松井兵英

○はじめに

布施谷というと美しいメロディーで静かに唱われる「布施谷節」を思い出します。その歌詞には、僧ヶ岳の雪形の「尺八を吹く虚無僧」の姿を見て農作業の暦としていたこと、布施川の水を頼りに田を耕していたが、また布施川の出水にも悩まされてきたこと、小川寺の三カ寺（真言宗の心蓮坊・光学坊・蓮蔵坊）を心の拠り所にしてきたこと、が歌われます。

○十一カ所の観音堂と多くの庚申塔など

布施谷は布施川を境に右岸は黒部市、左岸は魚津市となっていますが、一つの文化圏のようで、滝本氏によれば、十一カ所の観音堂があり、女性たちにより毎月の観音講が行われていたそうです。布施爪の布勢神社前の観音堂を開けてくださった女性のお話では、昔は隣の村に観音堂があると羨ましくて、一生懸命に寄付を集めたが、今は多忙な世の中になったことや高齢化などで、毎月のお講が隔月になったところ、また停めてしまったところも多いそうです。長引野では現在も毎月お参りされているそうで、堂内も境内もきれいに清掃されていました。田畑では区長さん立合いで拝見しましたが、今はお参りされていないので、少し荒れた感じでした。いずれも西国三十三所観音石仏が祀られ、真言宗では中央に獅子に乗った文殊菩薩や弘法様、彩色の残る石仏たちは素朴な彫りながら村の女人たちの祈りを受け止めていたのでしょう。尾山地区の谷川家の観音堂には四国八十八カ所の木像が祀られ、台座には黒部川筋の村の名前が目立ちました。いまま大切にお参りされている様子でした。青面金剛と一緒に祀られているお堂も多いのですが、男性の庚申講の主尊だったものが別の場所から遷されたとのこと、あちこちの村には単独の庚申堂の多さも目立ちます。

昼食の後、心蓮坊にお邪魔して和尚様に堂内を案内いただき、僧ヶ岳の大威徳明王木像、閻魔十王像と地獄絵、星供曼荼羅と胎蔵界曼荼羅の天井画などを拝見しました。内陣の裏には青面金剛の木像があり、庚申講がおこなわ

れなくなった村から預けられた掛軸が多数架けられていました。

○寛明行者のこと

平井一雄氏らが調査されている寛明行者の石碑や掛軸は飛騨街道沿線に多いが、このあたり片貝川の東山橋右岸や朴谷地区路傍（入る）、心蓮坊境内にもあり、明治十二〜十五年の造立が多いこと以外は不明だったのが、「心蓮坊の過去帳（欄外）に名前が出ている」という和尚さまのお話があり、寛明行者の足跡が解明される糸口になるかもしれません。

○珍しい石仏たち

天神山麓の道標地藏（肩にもう一つの手）、天神山の善光寺式阿弥陀三尊像と雨宝童子、布施爪農道脇・石碑横の虚空蔵菩薩（鼓を持つ）、大沢上流水神社の雨宝童子（北天神山）と石棒？黒沢墓地の自然石線刻五輪塔と六十六部石塔（新発見？）、心蓮坊寛明碑横の虚空蔵 or 弁才天、田畑地区の勢至菩薩（三夜様）、同墓地の子育て観音（おっぱい）など、さらに猿や狐が出る山道を最奥の嘉例沢まで登り、予定にはなかった磨崖仏を拝観し、新築された石の観音堂や庚申堂も車内から見ることができました。

○おわりに

台風のため一日早い実施でしたが、短い時間でも地元の方々や心蓮坊の和尚様のお話を聞くことができ、布施谷の人々の心に、少しは触れることができたように感じました。いつもながら滝本氏の、丹念な目と聞き取りによる知識の深さと詳細な資料には、敬服するばかりです。単に珍しい石仏を見て廻るといっても、地域とそこに暮らす人々の物語に接することは、私たちの人生観をいくらかでも豊かにしてくれるようです。

同行者が増えることを望んでいます。



←布施爪の観音堂

バット地蔵(福富地蔵尊)

滝本 やすし

富山市辰巳町二丁目臨濟宗国泰寺派興國寺の境内に、左手に野球のバットを持つ地蔵が立っている。円柱型の台石の正面に「福富地蔵尊／王貞治／本塁打756号／世界新達成／昭和五十二年九月三日／功德主／王仕福／王登美／当住静子／現住廿二世大節」と記された銘板が取り付けられている。さらにその下の台座には「巨人軍王貞治選手の榮譽を称賛す／(人名19)」と記された銘板が取り付けられている。

功德主としてプロ野球巨人軍王貞治選手の父・仕福と母・登美の名が記されており、一見すると本塁打世界新記録達成を賞して作られた地蔵のようである。しかし円柱型の台石の右側面に「昭和十九年十一月／當住一郎建之」の銘が刻まれていることから、昭和十九年に作られた地蔵の左手部分を改造してバットを持たせたものであることがわかる。

トレードマークの一本足ではないのが残念であるが、王選手は三十七才で菩薩になったのであろうか。



会からのお知らせ

来年の夏頃に研究紀要を発行したいと思います。皆様からの原稿を広く募集いたします。ページ数などの規定は特にありません。3月末を締切とします。

会報第54号は4月上旬発行予定です。こちら原稿を募集しております。家の近所の石仏紹介や、旅先で出会った石仏などでも構いません。楽しい会報にしたいと思います。

第56回例会は5月中旬に開催予定です。次回は福井市内の石仏めぐりを計画しています。毛矢白山神社も見学したいと思います。

石仏写真カレンダーを付録にしました。下半期のものは次号の付録とします。お気に入りの石仏写真があればお送りください。下半期分に掲載したいと思います。

平成30年度の会費を、同封の振替用紙にて納めてください。年会費は3000円です